



## 嘘発見器

うそ はっ けん き

アーサー・ビナード

先だって、読者からたいへんな手紙をもらった。「わたしはしょうらいさっかになりたいのでどうしたらさっかになれるかおしえてください」。差出人は、たま子ちゃんという小学二年生。

その質問に、しばらくうろたえてから、アーネスト・ヘミングウェイの言葉を思い出した。「いいものを書くのに欠かせないのは、嘘を見破る能力だ。どんな衝撃にも耐え得る完全内蔵型の嘘発見器。偉大な作家はみなそれを備えていた。創作のレーダーとして機能するのだ」——改めて調べると、ヘミングウェイがノーベル文学賞を受賞した四年後、1958年にインタビューで語ったものだった。

答えになるかどうか……。考えれば考えるほど、たま子ちゃんへの返事よりも、自らのちっぽけな「完全内蔵型嘘発見器」が気になってくる。「どんな衝撃にも耐え得る」状態だろうか……。これからどんな衝撃で試されることになるのか……。ただ、ひとついえるのは、日本語を覚えたことで、ほくの嘘発見器の微々たる性能が、少し高められたと思うことだ。

言語というのは、伝達の道具であると同時に、世界を

見るレンズの役割も果たす。英語の中で生まれ育った者が、「英語眼鏡」を通して世界を眺め、日本語が母語の者は「日本語眼鏡」をかけて、世界を見回している。だが、母語以外のもうひとつの言語を身につければ、眼鏡のかけ替えが可能になるのだ。

例えば、イラク戦争の動きを、英語眼鏡ですっと見ていると、悪役として“the insurgency”がたびたび登場する。眼鏡をかけ替えて、日本語を通して見れば、それが「武装勢力」という存在に変わる。二つの名称は似てはいるが、どこか微妙にずれてもいて、英語のほうが「反乱の暴徒」といった具合に、強く否定しようとする意図が感じられる。そのちょっとした差から出発して、掘り下げていくと、大きな嘘の発見につながる。今のイラクで起こっている運動は“insurgency”でも「武装勢力」でもない。フランス語に由来する片仮名語の「レジスタンス」で呼ばなければおかしい。

作家は結局、言葉選びという作業に人生のかなりの部分を費やすことになる。嘘を見破ってないと、真実を表すのにどの言葉が役立つか、選びようがないのだ。もちろん「嘘発見器」は、作家に限らず、どんな立場の人間にも欠かせないものだが。

(詩人)  
しじん